

定例会会議録 第9回 災害ボランティア・デイナー-浜北・天竜地区

日時：平成20年3月12日 19~21時 会場：浜北区 浜北高齢者ふれあい福祉センター

進行：中村 記録：立石 校正：野本

参加者（敬称略）〔下線は社協職員〕

浜北区役所：大城  
 浜北区：袴田（宮口）、栗田（西美蘭）、鈴木勝彦（於呂）、三室（尾野）、田坂（根堅）、古井（根堅）、富田（根堅）、牧野（新原）、鈴木菊代（貴布祢）、野本（小林）  
 天竜区役所：和田、木下  
 天竜区：中村（神沢）、武田（佐久間）  
 東区：立石（勤務：天竜地区センター）

参加報告 2月23、24日「第3回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」

第1部 被災状況を想定

第2部 被害想定・イメージから課題を挙げた

第3部 市町ボランティア本部（地元優先）、県支援センター（ボトムアップ）、それぞれの検証

- ・発災後3～7日間にどんな人が集まるかなど、立ち上げに関する課題を共有した。特にボランティア本部（センター）の運営協力に携わる人材・数が不足。
- ・県外からの支援方法を検討。

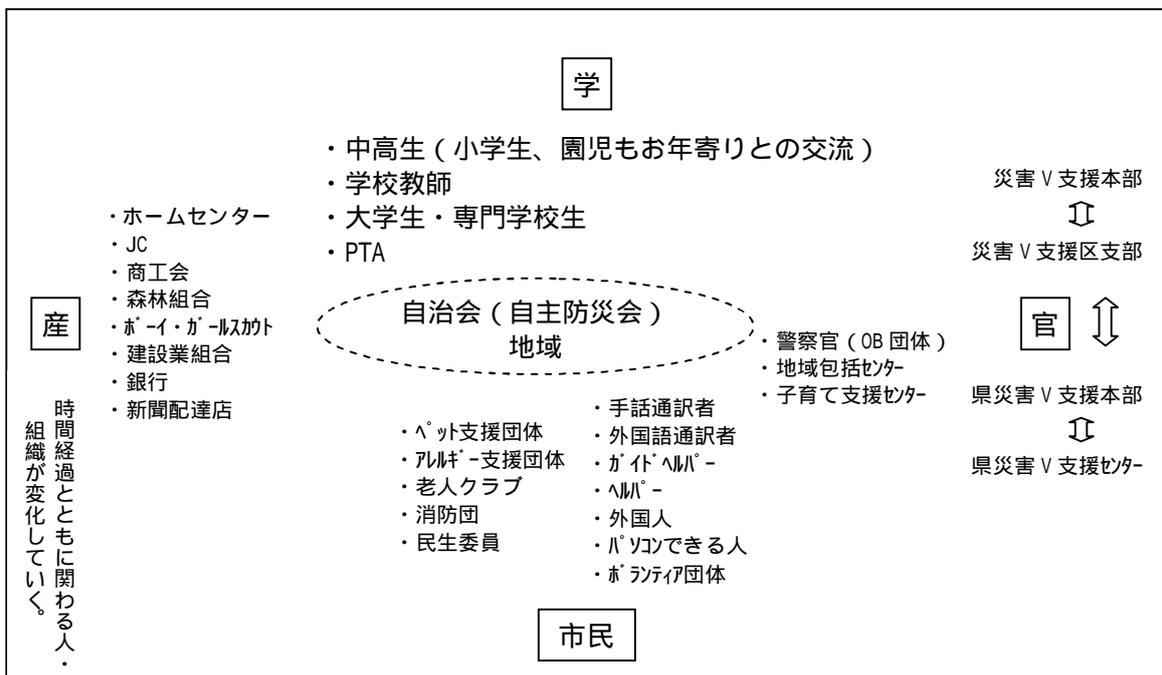


「ほのぼの灯りコンロ炊き出し」の振り返り

マニュアル、行動計画づくり

前回1/20の定例会で、発災後の個人の行動を具体的にシュミレーションして、被災者ニーズに気づいた。その後災害ボランティアセンターの開設から閉鎖・運営・体制について話し合った。

災害V本部（センター）に関わるのは、どんな人・組織が必要か。



## 定例会会議録 第9回 災害ボランティア・コーディネーター・浜北・天竜地区

日時：平成20年3月12日 19～21時 会場：浜北区 浜北高齢者ふれあい福祉センター

進行：中村 記録：立石 校正：野本



場について（災害Vセンターをどこに設置するか）

- ・浜北区 高齢者ふれあい福祉センター（予定）
- ・天竜区 区役所の外  
（行政と近い距離にあれば情報伝達が円滑）  
広域のため地域自治センターにも必要と考える
- ・被災地外ボランティアは市・区役所に行く。
- ・場所は地域ごと、被害の大きなところにサテライトを設置してもよい（一ヶ所にこだわらない）。

浜北 大きなショッピングセンターやパチンコ店の駐車場（公共施設と重複しない）

天竜 天竜厚生会の中にニーズが存在するので、サテライト設置が想定できる。

### まとめ&意見

- ・時間経過とともに関われる人や組織が変わっていく。
- ・勉強会や連絡会などを通して、幅広い人、団体、組織とつながりを作っていきたい。
- ・キーワードは色々な人たちとの連携、災害Vについてお互いに知識・情報の共有。
- ・前もって各組織との協定を結ばなければいざというときに動けないのでは。  
ボランティアや関係現状から協定までは難しいかも。
- ・自主防で、地元の協力商店などリストを作成、所持している。
- ・静岡県ボランティア支援センターとの関係がややこしい。
- ・住んでいるのは浜北区だが、天竜区役所のほうが近い。実際どう行動するか。
- ・来年度要援護者リストを作成していく（区役所福祉関係課が中心となって）。
- ・民生委員が要援護者リストを作成したが、それをどう使うかが問題。  
リストに載せることを拒否する人がいる。また、強制できない。  
本人や家族の同意がなくリストに加えられない人については、リスト化できないという情報として持っていることに意味がある。
- ・障害者については、最近の法改正によって施設から出てグループ方式により数人で地域に暮らす。その人たちの災害時の対応が、不明、又地域にお任せになっている。

### 20年度の活動について意見交換

- ・平成20年度活動計画により説明。 別紙資料
- ・三遠南信交流会は6月14日（予定）。15日には篠原小でPTA主催の防災講演会（講師：名古屋市RSY栗田代表）が予定されている。
- ・7月26日（土）講師は、名古屋市RSY浦野事務局長を予定。
- ・1月の合同研修会は、定例会メンバーおよび浜北、天竜での災害VCに関わる人・組織の学習会（連絡会）のメンバーとの年間の取り組みのまとめという位置づけ。

### 次回開催日程 5月21日又は28日（水）

時間：19：30 から

会場：天竜区山東 やまゆり荘

# 定例会会議録 第9回 災害ボランティア・コーディネーター浜北・天竜地区

日時：平成20年3月12日 19～21時 会場：浜北区 浜北高齢者ふれあい福祉センター

進行：中村 記録：立石 校正：野本

## 別紙資料 参考（予定）

平成20年度 活動計画（浜北・天竜地区災害ボランティア定例会）

・基本的な開催頻度：2ヶ月に1回は定例会又は活動を行う

時期	定例会	浜北区	天竜区	備考
5月12、28日	浜北・天竜地区 (やまゆり荘)			
5月25日(日)		浜北ボランティアフェスティバル		
7月5日(土) 予定	三遠南信交流会 参加、運営協力	詳細調整中		浜松社協本部 3月12日以降の情報
7月26日(土) 計画	企画・運営協力	災害ボランティアセミナー 市民公開講座		広がりへの仕掛け、合同研修 会に向けての入門編
		19～21時	14～16時	
8月31日(日)	総合防災訓練 災害ボランティアセンター-立上げ訓練研修			訓練主会場未定 必要に応じて事前研修会 平日の場合は×
8月～12月		「(仮称)災害時の連 携を考える会」を目指 した打合せ会又は学 習会1	区役所 天竜6地区社協 ボランティア 社協の顔合わせ会	合同研修会に向けての知識・ 情報共有
		「(仮称)災害時の連 携を考える会」を目指 した打合せ会又は学 習会2	区役所 天竜6地区社協 ボランティア 社協の学習会	合同研修会に向けての知識・ 情報共有
11月2日(日)		浜北ふれあい広場		
11月	浜北・天竜地区 (ふれあいセンター)			無理ならば3月へ
1月	合同研修会 (立上げ訓練 or 避難所体験 or ワークショップ)			災害ボランティア週間
2月	県内外の災害Vによる救援活動のための図上訓練(予定)			
3月	浜北・天竜地区 (やまゆり荘)			年度のまとめ 次年度の活動

その他

天竜区：中高生災害ボランティア講座(出前講座)

)天竜区内10校で調整可能な学校 平日の授業時間、放課後

)講師の協力 灯り、タンカーづくり、応急救急法 e t c

# 被災地に出かけて学ぶ

3月22・23日、いつ起きてもおかしくない東海地震に備え、平成19年3月25日に発生した1年後の石川県穴水町（能登半島地震被災地）に出かけ、なかなか表には出てこない「被災者・仮設住宅への支援」、「地域復興」、「今の姿」を被災者・支援者との交流などを通じて学ぶイベントツアーの参加報告レポートを作成しました。

【参加者】鈴木洋子（浜北V連絡協議会々長、民生児童委員）、岡部チヅ子（浜北区みどり会代表）

水野歩美（静岡大学情報学部3回生）、中村俊明・武田吉弘（浜松社協職員、消防団員）、野本

## 【スケジュール】

- 22日（土）13～17 「女性のための防災会議」参加
- 18～19 「カフェ・ロエールキャンドル」見学：商店街活性化イベント
- 19～21 「能登半島地震復興記念イベント参加者交流会：穴水町主催」参加
- 21～23 「商店街の皆さんと交流」
- 23日（日）9～14 「わいわい“かき”祭り」名古屋・浜松ブース出店
- 14～15 「グループ325、松田さん」交流会
- 帰り 「輪島市門前町内」を車上から視察

「女性のための防災会議」主催：さいがわふくし石川、穴水町、いしわか地域復興推進協議会

## 基調講演

- 「女性の視点で考える防災・減災・復興」  
相川康子（神戸大学経済経営研究所准教授）  
なぜ「女性の視点」が必要か
- ・人口の半分は女性である：常識化
  - ・自治体の防災、参画基本計画が改訂：変化
  - ・女性を「災害弱者」に閉じ込めない：主役
  - 「防災」を色に例えると「オレンジ」「黄色」「国防色」を多く、「制服」を着ている方がイメージされる。
  - ・女性は守られ役 訓練では炊き出し・救護
  - ・防災を担うのは、制服の「男性」中心。  
阪神淡路大震災の教訓
  - ・被災＝一人の命、くらしを失う。  
消防署・病院も被害＝パニック
  - ・死者数：女性は男性より1,000人多い。
  - ・震災、便乗解雇：女性パート、アルバイト  
避難所、避難先で何があったのか？
  - ・仮設トイレ：3週間後に100人に1基
  - ・つめたいおにぎり、唐揚げ弁当。  
水分を控える、元気がなくなる、弱い人から体調を崩す。  
ダメージ、ストレス＝関連死、2次被害当事者  
家庭で何があったのか？
  - ・男性は会社、復旧活動で長期不在。



- ・ライフライン断絶下の家事の負担増。  
エレベーターが動かない高層住宅の水運び
- ・保育所、学校、デイサービス施設の閉鎖。  
子供、お年寄りの世話＝精神的に不安定  
職場で何があったんか？
- ・災害時には使命感が異常に高揚する。
- ・「誰が一番に駆けつけたか」「何日泊まり込んだか」忠誠心を判断するような風潮。
- ・子育て、介護をしている女性には、過酷な課題  
復旧・復興過程に参画できないもどかしさ
- ・平時の各種審議会への女性参加率：20%
- ・兵庫県調査会：14%
- ・神戸市審議会：7%

- 交通基盤、産業復興の検討会は女性0。
- 各地「まちづくり協議会」も補完的役割。復旧時のアスベスト健康被害問題が目立つ作業従事者に中皮腫・肺ガンが拡大。女性の受難（インド洋大津波）
- 教育の場＝地震・津波の知識がない
- 宗教上の「衣服」「慎み」が足かせ。主人以外の男性と会話できないため、ニーズは男性のリーダが代弁。
- 避難先での暴力・搾取＝過酷支援策の格差
- 被災者生活再建支援法  
「被災者が世帯主であるという」要件被災後、結婚した女性、引退男性は対象外
- 民間融資制度＝女性には貸し渋り女性対応を想定したマニュアル
- 言わない、言えない、言っても封じ込まれるニーズをマニュアルに組み込む。
- それぞれの段階（タイミング）、長いスパン（長期的視点）を想定。
- 当事者参加の保障、説明と同意（共有化）。  
「兵庫行動枠組」の指摘
- 意志決定の過程に女性が参画する。
- 全ての人を考慮、理解でき、必要に応じて適切な行動可能な早期警戒メカニズムを開発。
- 女性ら脆弱な人々に配慮し、防災に関するトレーニングや教育の機会。  
女性への期待
- 日常、地域コミュニティの鍵を握る存在。
- 日ごろの地道な防災・減災活動の推進役。



### まとめ

- 災害はいつ起こるか分からない。
  - 男性不在の時間帯を想定した防災訓練。
  - 各種パターン想定避難、対応方法。
  - 市民の目（女性・要援護者配慮、民間事業者、専門家の協力）で再点検。
- 長いスパンを考えよう
  - 災害のサイクル 予防 救出・救命 救援・復旧・復興 減災社会
  - 教訓を生かすという事  
情報をどう届けるか トリアージ・災害医療 要援護者対策、エンパワーメント 自助・共助・公助 経済・生活復興  
どんな社会を目指すか。
- どうせやるなら前向きに
  - 「防災」はすべての人に関心があるテーマ  
女性の雇用確保 人権問題  
健康でいられる 体力・健康づくり  
一人暮らし 安全・安心なまちづくり  
人材育成 人づくり、ネットワーク  
緑の効用 自然保護、環境問題・共生  
地域の災害歴、防災の知恵の継承
- 21世紀の防災戦略
- 環境の変化 自然災害の増加・激化
- 家族、地域の変化 新たな「共助」の模索
- しなやかな減災社会＝弱点をカバー  
集中 分散、ハード整備 ソフト対策
- 多くの知恵を集めて模索する

### パネルディスカッション

「震災から得られた地域の絆」

- パネリスト 相川康子（基調講演講師）  
浦野 愛（名古屋市RSY）  
太田秀也（内閣府企画官）  
館林千賀子（読売新聞記者）
- コーディネーター 菅 磨志保（大阪大学講師）  
今の防災や能登半島地震から感じること  
館林 ）車いす、介助犬と共に生活
- 地震が発生した場合、おそらく車いすから落ち、近くに人が気づいてくれないと避難できない。また10階にすんでいるので、エレベーター停止したら身動きがとれない。
- 私自身は、介助犬と生活していることを同じ

フロア一方が認識。最近も犬が吠えた時に声をかけていただいた。

- ・要援護者の防災体制を名古屋市へ確認
  - ）名簿づくりは各区役所に任せている。
  - ）区役所で確認：11中2校区で作成
- ・今後は、名簿づくり だれが助けるか・個別計画 訓練の実践が必要である。
- ・「女性の一人暮らし」
 

近所付き合いをして自分自身から声を出さなければならないが、防犯意識が優先するため積極的に地域コミュニティに参加する人は、都市部において少ない。
- ・避難所 = 学校施設に障害者用トイレ、着替えなどのスペースが確保されるのか不安。
 

浦野 ）能登半島地震の支援活動者
- ・穴水町（被災地）から多くを学んだ。
- ・民生委員同士がカバーできるシステムが機能、要援護者安否確認が地震発生から2時間で完了。平時の地域コミュニティの力を感じた。
- ・V協議会、民生委員、行政などがグループワークでどんな被災後にどんな活動ができるかワークショップを開催。その中で“地域資源”を相互に認め合い、活かすことができた。
 

太田 ）災害応急対策担当
- ・要援護者の名簿づくり
 

全国で200 / 1800自治体が作成。個別計画が有るのはその内数パーセント。
- ・都市部の避難所における課題
 

女性から声が出しにくい整理用品などを含め、備蓄内容の見直しを呼びかけている。また、女性の声を聞くための相談窓口開設（男女半々の民生委員、看護師、健康相談員）の必要性を感じる。

相川 ）阪神淡路大震災で被災体験
- ・要援護者名簿
 

個人情報保護法が大きなカベになっている。

  - ）独居老人(一人暮らし)は、ある程度地域で把握。
  - ）障害者 対象内容が幅広く地域付き合いがないケースがあり情報を得られにくい。ただし、市（行政又は社協など）が保持。
  - ）難病患者 都道府県が情報を保持。普段の生活では見分けができてにくい。
- ・二重三重のセーフティネット
  - ）見えていない、見えない人の存在。

）一つのマニュアルでは対応できない。

コーディネーター 菅さん

女性の視点から考えた多様な状況、取り残されやすい当事者の立場に立った、また一人一人の多様なニーズに基づいた計画やマニュアルが必要となる。 グローバルガバナンス



### 今後の備えについて

- 浦野 ）能登半島地震支援者として
  - ・被災者の中で被害状況により格差が生まれる。
    - ・その中で、防災意識を継続するには、新潟中越沖地震被災地を訪問し、物資だけでなく“心”の支援を行い相手と対等な立場で支援する“互い様の” = 共助の気持ちが不可欠。
  - ・支援される側も負担「しんどい」という共通認識、相手を思いやる相乗効果が元気につながる。また、地域を元気づける引き上げ役と共に次代への継承 = 子供たちの防災。
- 館林 ）要援護者の立場から
  - ・「地域力を高める」ためには、その関係づくりが難しい。 = 煩わしい
  - ・防犯上では、挨拶もしない関係が存在。
  - ・危機管理でも近所、日常コミュニティ - 、顔が見える関係が必要。 安心・安全なまち
- 太田
  - ・国の役割は、 制度づくり 計画論（行政は計画がないと進まない）。
  - ・計画には女性の視点が必要、取り込む。
  - ・復興には個々ニーズ、地域コミュニティ、日常の女性の役割がポイント。
  - ・共助 = 地域の助け合い。 平時の各種行事の

参加、担い手は“女性”。

- ・幅広い意見を持つ地域の女性リーダーの育成、環境づくり重要。  
= 男性の理解・協力 負担が軽減できる  
相川
  - ・復興感が高い = 地域とつながりある人に多い
  - ・長期化すると被災者は疲れる
    - ) 行政職員、男女の区別なく
    - ) 施しされ続ける負担 = ストレス
    - ) コミュニティのリーダーに女性が多いので、同性の支援は、同じ視点・共感を得ることができる。
  - ・日頃の地道な防災・減災活動が大切。
    - ) ホームヘルパー、生活支援者などの助言、行動が大切。= “暮らし”からのサポート
    - ) 語りかける言葉を持つ人の存在がキー。
    - ) 日々コミュニティ(家、地域、会社)で活動。
  - ・「防災と言わない防災」をどのように日頃から展開するのか。
    - ) 日常から非日常時を見ることができる。
    - ) ニーズが届かない人に日々気づく。
- コーディネーター 菅さん  
「地域から得られる地域の絆」、高齢者、子供、過疎など地域の問題は、女性の視点から確認するプロセスが大切であると考えます。

さいごに

館林

- ・女性の視点・立場で活躍する場が必ずある。
- ・要援護者も受身だけでなく支援する側の可能性を秘めている。
- ・守られるだけでなく、地域やリーダーとして活躍できる。

浦野

- ・「友達は良いものだ、みんな助けてくれる」
- ・震災をバネに「今よりも良い“まち”を合言葉に。
- ・被災地は「助け合いを学ぶ場」、「人を大事・大切にする場・時」である。

太田

- ・災害発生時、防災は「コミュニティが大切」。

防災 = 防犯 = まちづくり = 安否確認

相川

「女性しか分からない」から「女性の方が気づきやすい」という観点で社会や防災・災害時の主役・主流へ。

女性の得意分野を増やす。= 幅広い担い手

)耐震・建築技術、地震メカニズム、逃げ方、防災計画、法律などの知識を学ぶ。

)要援護者の良き理解者、家の中からの防災。被災地からの「経験・教訓」を活かす。

### 「カフェ・ロエールキャンドル」

震災前から商店街の活性化イベントとして開催



意識して“まち”を見ると震災の傷跡がまだまだ残っています。

河川護岸の復旧工事風景



「能登半島地震復興記念イベント参加者交流会＆「商店街の皆さんと交流」  
滝井先生（災害Vセミナー講師）の挨拶風景



- ・兵庫県神戸市、新潟県川口町など  
愛知県からも名古屋市、知立市、  
豊川市など多くの地域から参加

商店街の皆さんとの交流会風景  
浜北区 鈴木洋子、岡部さん



「わいわい“かき”祭り」名古屋・浜松ブース出店  
名古屋・浜松ブース

- ）瀬戸物販売（瑞浪市の焼き物業者などから無償提供）
- ）篠原玉ねぎ（災害支援ネットワーク篠原 フィールドネット3.9 山崎勝也・鈴木直之さん提供）



前日は新潟県川口町の皆さんがブースを開設。

「足湯」でくつろぐお母さん  
本当に良い顔をしています！

瀬戸物は大物50円、小物10円/枚  
で販売、13時に完売。  
玉ねぎは開店1時間で完売（10時）、  
1個20円で販売。



### 「グループ325、松田さん」との交流会

グループ325の皆さん（穴水町女性会々長、元役場職員・教員など）

浦野さんがこの方たちとの出会いがなければ、今日がありませんでした！



自己紹介 名古屋RSY栗田さん



### ～「穴水町を訪れ感じたこと」～ 浜松社協浜北地区センター 中村俊明

今回、被災地の外から得た情報で知っているつもりの穴水町(能登半島地震被災地)に対して、実際どのように地域で、又どのような人々が被害に遭われ、その後どのように復旧・復興し過ごしているかを感じることを目的に訪れました。

建物の修復や立替えなど、少しずつ“まち”が復活している様子が感じられる反面、まだ赤紙が張られたままの建物も存在し、人々の気持ちがすぐ形にならない現実があるということを感じました。

幸い、「わいわい“かき”祭り」の出店ブースから観ていると、被災前から町おこし(商店街の活性化)的イベントがより盛大に行なわれており、震災を機に人々同士のつながりが強いものになっていることは、今後の生活に良いメリットになっていくと確信できたことでした。

初日の「災害のための女性会議」では、災害時等における女性の立場の重要性を強く投げかけた良い機会であり、今後このような内容を地域コミュニティの強化などにも活かしていくことが重要だと考えました。

### ～「さいごに」～

帰り際、旅館の前の川で漁をするご夫婦を見かけました。本当の穴水町の姿(風土・文化)を見たような風景です。

じっと魚を二人で待ち、時の流れに身を任している自然体に触れ“ほっと”する気持ちをなります。

この位置関係がボランティア、市民協働のパートナーに求められている基本的な「姿勢」であることに気づかされるシーンでした。

